

# 第一人称単数の社会へ向けて

正慶 孝\*

## 『経済人の終わり』

P・F・ドラッカーが、狂気のファシズムがヨーロッパを混乱の極みに陥れることを予見して『『経済人』の終わり——全体主義の起原』を著したのは、一九三九年のことであった。この書物は、ヒトラーが政権をとった一九三三年一月三十日の数週間後に書きはじめられ、一部は一九三五年か三六年に発表され、残りは三七年四月から年末にかけて書き上げられたものである。この書物のなかでドラッカーは、ひと昔前の時代のひとのように宗教的信念をもつことができず、また政治的に疎外された大衆の絶望がファシズムを生んだと主張した。ドラッカーはまた、「大衆を全体主義のデマゴギーと悪魔学の犠牲にした直接の原因は、資本主義の失敗よりも、教義および救世主としてのマルクス主義の失敗だった……。」<sup>(1)</sup>と、市民宗教あるいは救世主として登場したマルクス主義

がスターリン主義に変質してしまったことをきびしく糾弾している。ドラッカーは、ヒトラーと同様オーストリア出身で、ドイツで教育を受けた知識人である。時代はドラッカーの予想通りに進行した。

ドラッカーのこの書物は、全体主義 (totalitarianism) について書かれた最初の書物で、アメリカで出版された。その後出版されたイギリスでは、当時野にあったウィンストン・チャーチルが書評の筆をとり激賞したばかりか、その後首相に就任したチャーチルは、この書物を陸軍士官学校の卒業生への支給品にいれるよう指示した。全体主義と闘うのに最強の理論が含まれているからである。

大衆の絶望は、いまの時代にも存在する。それではかつてと同じように、この大衆の絶望がファシズムを招来することになるのであろうか。問題は深刻かつ重大である。この問題を検討することは、時代の要請であるといっても過言ではないであろう。

ドラッカーとおなじ頃、オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガは、『朝の影のなかに——わたしたちの時代の精神の病の診断』(一九三五)のなかで、ドラッカーの問題意識と同様に、つぎのようにのべている。わたしたちは憑かれた世界に生きている。そのことをよく承知している。予期せぬものとなかろう、やがては狂気が爆発する、あわれなヨーロッパの人びとは、呆然自失のうちにとりのこされる、モーターはなおまわりつづける、旗は風にひるがえる、だが精神はどこへいったのか。<sup>(2)</sup>

ホイジンガのいう「憑かれた時代」とは、大衆社会の進行によって、判断力を著しく低下してしまった時代という意味である。結局、このことがファシズムを招来することとなる。この判断力の低下をホイジンガ

は、ピュアリリズムとよんだ。そして、つぎのようにいう。

判断能力の発展段階からみて、それ相応以下にふるまう社会、子供を大人にひきあげようとはせず、逆に子供の行動にあわせてふるまう社会、このような社会の精神態度をピュアリリズムと名付けようとおもう<sup>(3)</sup>。

しかも、このピュアリリズムすなわち判断力の全般的衰弱がいたるところに存在しているという。たとえば、歩調行進がそれだという。

何万人何十万人が動員される。どんな野原でもせまかろう、なにしろ、一国全体が、鉛の兵隊よろしく、隊伍をそろえて、気をつけの姿勢をとるのだ。無縁の傍観者さえも、その暗示力にはさからえぬほどのだ。なにしろ偉大にみえる。力をおもわせる。——子供じみている。価値ある目的の幻影を生むむなし形式だ。なお思考力を失っていない人ならば、だれでも、こういったことには価値がないと知っている。なんの価値もないのだ。ただ、シャツと手のヒロイズムが、じつにピュアリリズム一般そのものであることを明かすのみである<sup>(4)</sup>。

ヒトラーのナチズムもベニート・ムッソリーニのファシズムとともにピュアリリズムを背景に成立した政治運動であった。シャツと手のヒロイズムとは、分列行進によって大衆に威力を示威した、ファシストの手段である。このシャツと手にスローガンがつけくわわる。そこで、ホイジンは、つぎのように批判する。

……いったい、ドイツ人のいう「血と土地」というのは、一種のスローガン以外のなんであるというのか。比喩の暗示力にたよって、論理的基礎の欠落と、実際面におよぼす危険のいっさいを「かくしあざ

むこう」とする宣伝文句以外のなんなのだ。この種の、正しくはそれと認知されないままに公的、科学的語彙のうちにうけいれられたスローガン、これは、ことの性質上、二重に危険なはたらきをもっているのである。

スローガンは、こんにち、商業広告、政治宣伝、そのいずれであれ、総じて広告の領分に属している。政治的プロパガンダは、つまりすべて広告なのであり、公的機関によって発せられるとき、とくにそうである。異常肥大をみせる現代の産物、広告業全般は、進んだ文化にあって特徴的な、あの半まじめの精神傾向の上に基礎をおいている。これはおそらく老齡期の現象とみなされよう。ところがこれの正しい呼び名はピュアリリズムなのである<sup>(5)</sup>。

プロパガンダ (propaganda) という語は、もともとローマ・カトリック教会の用語で布教・伝道を意味する。頭文字を大文字で書けばヴァチカンにある布教聖省のことをいい、ローマにはヨーロッパ以外の国や地域での伝道司祭養成のためのプロパガンダ大学もある。転じて、政治や商品の広告宣伝 (advertisement) の意味でも使われるようになった。こんにちでは、伝道という意味よりも広告宣伝のほうがよく知られている。思考力が貧弱なピュアリリズムの支配する時代には、プロパガンダは効果的である。アドルフ・ヒトラーは、このことを熟知していた。かれは『わが闘争』のなかで次のようにいっている。

宣伝はすべて大衆的であるべきであり、その知的水準は、宣伝が目ざすべきものの中で最低級のものがわかる程度に調整すべきである。それゆえ獲得すべき大衆の人数が多くなればなるほど、純粹の知的高度はますます低くしなければならぬ。……

宣伝の学術的な余計なものが少なくなれば少ないほど、そしてそれがもたら大衆の感情をいっそう考慮すればするほど、効果はますます的確になる。

プロパガンダを重視したヒトラーは、宣伝省を設置し、ゲッペルスをその担当大臣にしたことは、よく知られていることであろう。一九三六年のベルリン・オリンピックでは史上はじめて聖火リレーを導入した。これはナチス・ドイツを国内外に強くアピールするためであった。二十世紀は、大衆の世紀であった。それをもたらしたのは、人口の増大であった。ヴェルナー・ゾンバルトは、ヨーロッパにおける人口の推移をつぎのようにいっている。

「生めよ、ふえよ」の古き箴言にしたがって、まずヨーロッパ諸国における人口は二倍となり、また三倍になった。一八〇〇年にはやっと一億八千万の人口が住んでいただけであるのに、一九一四年にはすでに四億五千万が居をかまえるようになった。つまり、ヨーロッパの民族生活のそもそもの最初から一八〇〇年に到るまでに、これらの人々はようやく一億八千万に達しただけであるのに、十九世紀の一世紀間にその一倍半——二億七千万——が付け加わったわけである。わずか一世紀の間に！このことこそは、欧州近代史に関するすべての考察の出発点たるべき基本的事実に他ならない。

ゾンバルトのいう人口増加はヨーロッパだけでみられたことではなく、世界中でみられた現象であった。欧州政治史にとどまらず、世界史にかんするすべての考察の出発点がこの人口爆発である。この人口爆発によって、いままでの市民社会とは異なる大衆社会が誕生したのである。

## 新しい社会

十七世紀のイギリス、アメリカやフランスの十八世紀の市民革命（ブルジョワ革命）によって成立した「近代市民社会」は、「旧制度」（アンシャン・レジーム）を打倒して成立した新しい社会で、古い束縛や軛から解放された社会であった。この『新しい社会』の出発点について、E・H・カーは、フランス革命、アメリカ革命、および産業革命をあげている。この三種の革命が、こんにちの社会の骨格をなしていることを疑う人はいないであろう。現代の多くの国家は、一応は経済的には市場経済、政治的には普通選挙にもとづく民主主義にもとづいて社会生活が営まれているからである。

けれども、二十世紀にはいってからの社会のソーシャル・フレイムワーク（社会の枠組）は、政治的にも経済的にも市民革命時とは、大きく異なっている。その最大の理由は前述したとおり、人口爆発によって大衆社会が成立したことで、『新しい社会』は、新しいステージにはいっていったのである。たとえば国家の変質がある。市民社会の望ましい国家は、自由放任の夜警国家であった。「もともと少なく統治する政府が最良の政府である。」（トーマス・ジェファソン）のはずの国家が「その論理的な反対物であると同時に論理的な帰結でもある今日の『福祉国家』に姿を変えて行った、……」。このようなフランスフォーメーション（転換）が起きたのは、一九三〇年代の「不況と失業」の時代であった。この時代に成立したのが、アドルフ・ヒトラーのナチス・ドイツ体制とフランクリン・ローズベルトの「混合経済」（Mixed Economy）体制である。ヒトラーもローズベルトも同じく三三年に首相と大統領に

それぞれ就任している。ヒトラーのアウトバーン建設もローズベルトの TVA（テネシー河峽谷公社）の発想も、現象的にはよく似ている。これは当然のことである。政府が経済活動に積極的に乗り出し、有効需要を創出して失業をへらし、景気回復をはかるという政策を採用していることは、両者とも不況と失業をいかにして克服するかという、一九三〇年代の緊要の課題に対する回答であったからである。かくして、完全雇用が最大の経済政策の目標となり、すべてがその目標を達成するための下位目標となった。政府が経済活動に積極的に介入し参加するようになったのは、ヒトラーとローズベルトの時代以降のことである。自由放任の経済体制から混合経済体制への転換がいかに重要な変化であったかは、J・ストレイチーが『現代の資本主義』（一九五六）のなかで、つぎのようにのべているとおりである。

国家の機能は、競争過程に対する、審判官や調停者のそれであった。すなわち、国家の機能は、本質的に独立した競争者間の関係にとどまらべき契約の、強制者となることであった。したがって、もし国家が審判官の立場を捨て、生産の勝負に手を出せば、経済の性質そのものが変化するだろう。にもかかわらず、競争者の数が減少し規模が拡大するに至ったとき、国家はまさにそうすることをよぎなくされたのである。

国家が生産過程に参加することをよぎなくされた理由の一つは、事態が成行きのままに放置された場合、経済はますます不安定への悲惨な傾向を示すことが、苦しい経験をおして発見されたことである。

ストレイチーのいう「不安定への悲惨な傾向」とは、不況や失業のことであることはいうまでもない。「競争者の数が減少し規模が拡大する」

とは、独占や寡占が進行していることをさしている。ドイツではコンツェルン、アメリカではシンジケートやトラスト、日本では財閥というように、資本の集中・集積が進み、資本主義が新しい段階に達したことによって、国家の経済活動への介入・参加が始まったというのである。それまでの政府の仕事は、J・ペンサムのつぎの発言（『政治経済学綱要』）がよく示している。

一般的な原則は、政府は何事もなしてはならないし、企ててもならないということである。このような場合の政府の守るべきモットーあるいは標語は、お静かにである。<sup>10)</sup>

この自由放任に関し、その終焉を唱えたのが、完全雇用の経済政策の理論的根拠をのちに提供することとなるJ・M・ケインズであった。かれは、「自由放任の終焉」（一九二六）と題された論文のなかで、自由放任の論拠とされてきた形而上学的原理ないし一般的原理は、一掃されるべきであるとして、つぎのようにいっている。

現代最大の経済悪の多くは、危険と不確実性と無知の所産である。富のはなはだしい不平等が生じるのは、境遇とか能力に恵まれている特定の個人が不確実性や無知につけ込んで利益を手に入れることができるからであり、また同じ理由から、大企業も、しばしば、富くじのよくなるものだからである。しかも、このような同じ諸要因が、労働者の失業や、あるいは合理的な事業上の期待の破綻、効率性と生産の減退などの原因ともなっている。しかし、その治療法は、個人の手の届かないところにある。その病状を悪化させた方が、かえって個人のためになるかもしれないのである。このような事態にたいしてする治療法は、一つには、中央機関による通貨および信用の慎重な管理に求め

られるべきであり、また一つには、知っておけば有益な、企業にかんするあらゆる事実の——必要とあれば法律による——全面的な公開と  
いうことを含む、事業状況にかんする膨大な量の情報の収集と普及に  
求められるべきであると、私は考える<sup>(1)</sup>。

ケインズは、全面的な情報公開、こんにちのことばでいえば、企業の  
「説明責任」(accountability)や情報公開(disclosure)と、適切な金融  
政策によって、資本主義のもつ病理的な側面をなくし、全般的な経済活  
動を制御できるものと考えている。ケインズは、さらにつきのようにい  
う。

私としては、資本主義は賢明に管理されるかぎり、おそらく、経済  
の目的を達成するうえで、今までに見られたどのような代替的システ  
ムにもまして効率的なものにすることができると考えているが、本質的には、幾多  
の点できわめて好ましくないものであると考えている。われわれの問  
題は、能うるかぎり効率的であって、しかも満足のゆく生活様式にか  
んするわれわれの考えに抵触することのないような、社会組織を創り  
出すことである<sup>(12)</sup>。

資本主義のもつデメリットを解消し、満足のゆく生活様式をつくりだ  
すためには、自由放任主義に告別し、「われわれの考えに抵触すること  
のない」社会組織として、政府がアンパイア(umpire)としてだけで  
はなく、プレイヤー(player)として参加する仕組をつくり出す必要  
がある、とケインズは主張するのである。「われわれの考えに抵触する  
ことのない」社会組織とは、混合経済体制のことに他ならない。この論  
文が発表された十年後の一九三六年には、混合経済体制の論拠ともい

べき『雇用、利子および貨幣の一般理論』が上梓された。

### 社会心理学的諸ルール

ケインズのこの書物は、社会心理に根拠をおくきわめて心理学的な経  
済理論である。ケインズ自身、この書物のなかで社会心理学的諸ルール  
(social psychological rules)‘大衆心理(mass psychology)’、多数  
の無知な個人の大衆心理(mass psychology of a large number of ig-  
norant individuals)‘あるいは平均および限界消費性向(average or  
marginal propensity to consume)などの表現を随所にもちいている  
ように、重要な理論の前提には大衆社会における社会心理学的な分析が  
あるのである。

合理的に行動する個人の集合体であるのならば、ケインズ経済学によ  
うに「全体として」(as a whole)の「集計量」(aggregate)を扱うマ  
クロ経済学を必要とはしない。社会心理が個人心理の総和であるのなら  
ば、社会心理学も必要ではない。個人心理をそのまま適用すれば、それ  
で充分である。ミクロとマクロはつねに一致するからである。ところが、  
実際にはミクロとマクロは相反するのが一般的である。マクロ経済学を  
必要とするのは、この「合成の誤謬」(fallacy of composition)が存  
在するためである。

このことは、十九世紀の公衆社会から二十世紀の大衆社会へと社会が  
大きくシフトしていることを経済理論の面で示しているのである。これ  
は言い換えれば、統制的市場から自己調整的市場へと転換した市場経済  
がふたたび統制的市場へ転換したことを意味する。ケインズの提案は、  
要するに「新重商主義」の提案であった。『雇用、利子および貨幣の一

『一般理論』の第二十三章は、「重商主義、高利、スタンプ貨幣および過小消費に関する覚書」と題されており、ケインズが重商主義に大いに共感を寄せていることから、このことは明らかである。ケインズは、「経済的国家主義者」(economic nationalist)であることは、もっと注目されてよい。

公衆社会から大衆社会へのシフトは、経済面だけではなかった。政治も文化も大きく変換した。政治上の変換は、十九世紀の消極的な自由放任国家(夜警国家)から二十世紀の積極的な社会福祉国家へとシフトした。社会福祉政策は、もちろん人道上の理由からではなく、資本主義自体を維持していくために必要な措置であった。ドイツのビスマルクや英国のグラッドストーンやディズレーリによってとられた社会政策は、労働力の再生産のためばかりではなく、有効需要を維持してゆくために必要な措置であった。「安価な政府」は、膨大な行政需要に対応して「租税国家」「行政国家」へと変質する。ファシズムは、このような世界史的な時代の変換から生じたのである。

### ファシズムと権威主義的人格

個人心理の単純な総和として社会心理が存在するのではないことは、前述したとおりである。個人を意味する英語の individual は in (＝not) と divide (わけ) の二語からなるように、「これ以上わけることのできない」存在という意味であることは、よく知られている事実であろう。この社会を構成する最小単位である個人の意思や行動を重視する思想は、近代市民社会の中核思想であるはずなのに、この個人の尊厳を前提した近代市民社会が、なにゆえにやすやすとファシズムへ移行し

てしまったのであろうか。

この問題にフロイト派心理学から解答をあたえたひとりが、エーリッヒ・フロムであった。フロムは、『自由からの逃走』(一九四一)で、この問題を論じた。かれはいう。

……近代人は、個人に安定をあたえると同時にかれを束縛していた前個人的社会の絆からは自由になったが、個人的自我の実現、すなわち個人の知的な、感情的な、また感覚的な諸能力の表現という積極的な意味における自由は、まだ獲得していないのである。自由は近代人に独立と合理性とをあたえたが、一方個人を孤独におとし入れ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独はたえがたいものである。かれは自由の重荷からのがれて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性にもとづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一に迫られる。<sup>(13)</sup>

「自由の重荷からのがれて新しい依存と従属」を求めた結果、すなわち『自由からの逃走』の結果が、ファシズムの選択であると、フロムは主張するのである。さらに、フロムは、つぎのようにいう。

しかし、人間は自由の古い敵からみずから解放したが、ことなつた性質をもった新しい敵が擡頭してきたことにまったく気がついていない。その新しい敵というのは、本質的には外的な束縛ではなくて、パースナリティの自由を十分に実現することを妨げる、内面的な要素である。<sup>(14)</sup>

フランス革命以来、個人の自由は最高の価値であり、個人は自己実現(self-actualization or self-realization)が目標となった。経済思想と

しての自由放任は、個人主義の基盤のうえに築かれた思想であった。しかし、「人間はよりいっそう独立的、自律的、批判的になったこと」と同時に、「よりいっそう孤立した、孤独な、恐怖にみちたもの」になったのである。これは、資本主義社会の発展が、各個人のパーソナリティに影響をあたえ、「商品と同じように、これらの人間の性質の価値をきめるものは、いや、まさに人間存在そのものをきめるものは、市場である。」社会になっていったからである。その社会においては、「もしある人間のもっている性質が役に立たなければ、その人間は無価値である。」ということになる。

ある個人の価値が市場での交換価値によって決定されるのであれば、個人はいつも失業と不況あるいは戦争の脅威などにいつでも怯えざるをえない無力で不安定な存在になるであろう。彼がこの耐えがたい状態にうちかつために、ふたつの選択肢がのこされている。

一つの道によって、かれは「積極的自由」へと進むことができる。かれは愛情と仕事において、かれの感情的感覺のおよび知的な能力の純粹な表現において、自発的にかれ自身を世界と結びつけることができる。こうしてかれは、独立と個人的自我の統一とをすてることがなしに、再び人間と自然とかれ自身と、一つになることができる。<sup>(15)</sup>

問題は、もう一つの道である。

かれのためにひらかれているもう一つの道は、かれを後退させ、自由をすてさせる。そして個人的自我と世界とのあいだに生じた分裂を消滅させることによって、かれの孤独感にうちかとうと努力する。この第二の道は、かれを世界と再び結びつけるとしても、個人として解放されるまえに、かれが世界と関係していたようなぐあいにはけっし

ていかない。なぜなら分離しているという事実を動かすことはできないからである。この道はもしそれがながびけば、生きていくこともできないような、たえがたい状態からの逃避にすぎない。<sup>(16)</sup>

第二の道がファシズムの道であることは、もはや明白であろう。このような『自由からの逃走』の最初のメカニズムは、「……人間が個人的自我の独立をすてて、その個人にはかけているような力を獲得するため、かれの外がわのなにものかと、あるいはなにごとかと、自分自身を融合させようとする傾向」である。かれの外がわのなにもかである權威的なものと自分をアイデンティファイさせようとすることによって、不安定な恐怖心から逃れようとするマゾヒズムの傾向と、『ビヒモス』(Behemoth、巨大な国家のこと)あるいは『メガ・マシン』(巨大な機械)をつくりあげ、個人を小さな部品のようにあつかおうとするサディズムの傾向をもつ權威主義的権力者とが結びついて、ファシスト国家が成立する。しかもマゾヒスト大衆は、けっしてサディズムの満足を奪われることはないのである。フロムはまたつぎのようにもいう。

「指導者」は第一番に権力を享有する人間であるが、大衆もけっしてサディズムの満足を奪われてはいなかった。ドイツ内の人種政治的少数者や、また最後には、弱小であるとか衰亡しつつあるとかされる他の諸国民が、大衆を満足させるサディズムの対象である。<sup>(17)</sup>

世界制覇を目指したヒトラーとその一党は、マゾヒスト大衆に対し、征服した諸国民やユダヤ人をサディスティックに取り扱うよう宣伝して、かれらの野望を達成するマニフェストウに対するいっそうの同意をとりつけることに成功したのである。このようにして、マゾヒストの大衆は、

こんどはサディスト的大衆として登場する。この二重構造によって、サド的マゾの共棲関係が成立した。フロムは、このサド的・マゾ的衝動がヒトラーとナチスの組織にあることを指摘した。

### 「人間という哀れな動物」

ヒトラーは、一九三四年に総統(Führer)に就任した。フューラーというのは、指導者のほか、ガイドとか運転手などの意味でドイツ語では日常的にしばしばつかわれることばで、イタリア語のドゥーチェと似たことばである。つづいてヒトラーは全権委任法を制定して独裁者となる。ヒトラー自身は、青年時代のことを回想して、「とるにたりない人間」「名もない人間」だといっている。その「とるにたりない人間」「名もない人間」が、救世主のような存在になっていったのである。フロムは、ドイツがヒトラー上等兵に蹂躪されてしまったのは、かれの教説およびナチズムの組織が権威主義的性格のひとつの極端な形態を表現し、またまさにこの事実によって、ヒトラーと多かれ少なかれ同じ性格構造をもった民衆に強くアピールしたからだ、主張する。

権威主義的性格の本質は、サディズム的衝動とマゾヒズム的衝動との同時的存在として述べてきた。サディズムは他人にたいして、多かれ少かれ破壊性と混合した絶対的な支配力をめざすものと理解され、マゾヒズムは自己を一つの圧倒的に強い力のうちに解消し、その力の強さと栄光に参加することをめざすものと理解される。サディズム的傾向もマゾヒズム的傾向もともに、孤立した個人が独り立ちできない無能力と、この孤独を克服するために共棲的關係を求め要求とから生ずる<sup>(18)</sup>。

フロムは、ドストイェフスキイの『カラマゾフの兄弟』のなかの「人間という哀れな動物は、もって生まれた自由の賜物を、できるだけ早く、ゆずり渡せる相手を見つけたという、強い願いだけしかもっていない。」という一節をひいて、「おびえた個人は、自分をだれかと、あるいはなにかと結びつけようとする。もはやかれは自分自身をもちきれない。かれは狂気のように自分自身からのがれようとする。そしてこの重荷としての、自己をとりのぞくことによって、再び安定感をえようとす<sup>(19)</sup>。」と、のべている。

日本語の疎外という語は、英語の alienation の訳語で、alienation のもともとの意味は、英国の契約法における「商品の譲渡」という意味である。ここから、自己を他者に「譲り渡すこと」の意味でつかわれるようになったのである。ファシズムは、疎外の産物でもある。説得と誘惑の技術にたけた煽動政治家(デマゴグ)によって、大衆の疎外は巧妙に利用されてきた。大衆を意味する英語の mass は、粉のようなものひとかたまりという意味のことばで、物理学では「質量」と訳されている。もともとはつなががなければまとまりのないものをこのことばは意味している。

粉体のようにこねあわせるものがなければまとまりがないように、大衆社会は、こねあわせる人物が登場してひとつのまとまったものにしようとする力が働く。それがファシズムであった。ファシシヨ(Fascio)がイタリア語で束という意味であるように、ファシズムは、バラバラのものをひとまとめにするという意味のことばである。

もちろん、大衆がなんであるかをいうことは難しい。たとえばカール・ヤスパースは、『現代の精神的状況』のなかで大衆についてつぎの

ように語っている。

大衆がなんであるかは一義的ではない。不特定の多数の人間であるとか、すべての人間であるとかいう、大衆の形式的意味は、現在の意識にとつてはかつてなかったほど刺激的なものをもっている。それと、いうのも、大衆は、そのいちいちの分子においては、それぞれ自分の自然的な権利と満たされざる要求とをもっていて、それらが大衆においてひとつの圧倒的な力をもった要求にまで総結集させるものであるところの、人間から成り立っているからである。しかしながら、大衆は、この意味では、外面的な量のものであるから、実は本質を欠いたままである。<sup>(20)</sup>

このような性格をもつ大衆によって構成されている社会が大衆社会であり、それは二十世紀の特徴的な事実であった。それがサディズム的傾向をもつ支配者とマゾヒズム的傾向をもつ被支配者とが結びあつたとき成立したのがファシズムであつたことは、すでにのべたとおりである。

サディズム的傾向とマゾヒズム的傾向の共棲は、ドイツだけの現象ではなかつた。ソビエト・ロシアでも、アメリカ合衆国でさえ、同様に起きた現象である。ヒトラーが首相に就任した一九三三年には、ソビエト・ロシアでは第一次五カ年計画が開始され、翌三四年にヒトラーがフューラーに就任した年には、党政治局員兼書記局員であつたキーロフが暗殺され、スターリンによる大粛清がはじまつている。アメリカでさえ、この時代に官僚主義的な国家統制の動きがはじまつている。アーヴィング・ホウは、『大勢順応のこの時代』のなかでつぎのようにいう。

ニュー・ディールの二つの柱となつた社会立法と経済面への国家の介入とは、互いに無関係なわけではないが、時代的には別々に発達し

たものである。ヨーロッパではこの二つは必ずしも同時に登場したことはない。ところがアメリカでは、この二つは同時に採用され、そのことが知識人を熱狂させるとともに、批判力をも鈍らせたのであつた。<sup>(24)</sup>

社会立法と経済面への国家の介入によって、国家統制の動きが強化されたのは、一九三三年のローズベルトが大統領に就任してからのことであつた。この時代の特徴は、ドイツ、イタリア、日本ばかりではなく、いくつかの国家で国家主義的傾向が強まった時代である。ソビエト・ロシアもまた、スターリニズムが優勢となり、社会主義の理念が早々に放棄されていった。第二次世界大戦が自由主義陣営（連合国）とファシズムの枢軸国との戦争であるなどは、簡単にいうことはできない。アメリカ合衆国は、国家統制の強い官僚主義国家に転じ、ソフトな抑圧の体系が成立しているからである。

#### 当事者能力の放棄

わたくしがここでいう第一人称単数の思想とは、自己責任と矜持をもつ個人の個人主義の思想のことである。近代市民社会は、個人の自由意思が尊重されるとともに、個人は社会的義務と責任を果たすことによって成立している社会であるから、第一人称単数の思想は、近代市民社会の根底をなす思想であるといつてもいいであろう。ゲゼルシャフトからゲマインシャフトへ、身分から契約へ、あるいはコミュニティからアソシエーションへ等、いろいろな表現があるが、近代市民社会は、集団から個人へと意思決定の単位が移行して、個人の責任と行動とに根拠のおく社会のはずであつた。自由主義も民主主義も第一人称単数、すなわ

ちわたくしの意見、わたくしの行動、その結果に対する責任に根拠をおくことによってささえられている社会である。前述したように、個人主義の個人とはこれ以上「わけることのできない」存在である。これ以上「わけることのできない」個人が、他者の命令や指示ではなく、自発的意思によってさまざまなことを決定する仕組が存在することによって成立するのが個人主義であった。主人 (Herr) と奴隷 (Knecht) の関係がなくなり、個人と個人が対等の関係となる社会である。すなわち、「私は考える」「私は感じる」「私は意欲する」とかいうことを互いに言い合うことのできる社会であり、自分の意見や行動に責任をもつ、当事者能力をもつ個人からなり立っている社会である。

アリストテレスがのべているように、人間は「ポリスの動物」である。他者との協力や共働なくして、生活してゆくことはできない。経済生活をとっても、社会的分業と交換とによって、さまざまな財貨やサービスを手に入れ、生活を営むことが可能となっている。財貨やサービスの交換と同様、意見の交換である言論も自由に行なわれ、発言の機会は充分に保証されているのが近代市民社会である。

にもかかわらず、かつて『自由からの逃走』があったように、現在でもつねに『自由からの逃走』が生じる可能性が存在している。どのレベルでの会議でも発言する人は限られ、政治的無関心が蔓延している。大勢に順応することが行動のメルクマールであり、思考は停止したままであり、どちらの意見なのか明確ではない曖昧主義（オブスキュランティズム）が支配し、大衆操作や操縦がしやすい環境ができあがっている。しかも、「いま、ここで志向」(here and now orientation) あるいは「即時的満足」(instant satisfaction) が人びとの行動を左右している。いわゆる「マクドナルド化」の進行である。さらにこの傾向に拍車をか

けているのが、科学技術の発展、とくに情報技術の発展にともなう匿名性である。匿名であるため、非難されずに他者を攻撃することが容易になっている。匿名性は無責任な行動をいっそう誘発する傾向をもっている。

第一人称単数であるべきものが第一人称複数になったり、第三人称単数や複数になってしまったりする。私の意見がわれわれの意見にかわってしまったり、私がいっていることがあの人がいっていると、あのかたちがいっているとかにすりかわってしまう。このすりかえが大衆社会の特徴であり、言論や行動に対する私の責任をとろうとしないことかしばしば生ずることとなる。大衆社会は、みずから当事者能力を放棄し、だれかの影に隠れて責任をとらなくなる保護色の社会なのである。前述のヤスパースは、つぎのようにのべている。

誠実に責任をひき受ける人間はまれにしかない。偶然統率者になった者である多数の人々は、単独では決断できないという態度を持つ。裁判所、監督庁、委員会の決議、それがものをいう——しかも、それらはたがいに責任を転嫁し合う。<sup>22)</sup>

ヤスパースの指摘しているように、「誠実に責任をひき受ける人間」はまれになり、統率者になったものでさえ、「単独では決断できない」ばかりではなく、「責任を転嫁し合う」というのが、大衆社会の特徴である。ここには第一人称単数の気概も判断力も意思もみられない、無責任の体制が支配する。かくして、個人の権限は、民主的に運営するといふ口実から委員会の権限に譲渡されることになる。ファシズムもスターリン主義も同様に、大衆が個人個人に等しく与えられた一人称単数の権限を放棄した結果、成立する無責任体制の委員会である。フロムは、

『自由からの逃走』の続編ともいべき『正気の社会』（一九五五）のなかで、つぎのようにいっている。

現代の全体主義においても、ルソーの国家論においても、個人は自分の権利を放棄し、それを唯一の独裁者である国家に投影すると考えられる。ファシズムとスターリン主義では、完全に疎外された個人が偶像の祭壇にぬかずくのであって、この偶像が、どういう名で知られていようと、つまり国家だろうと階級だろうと、集団そのほかかなんであろうとほとんどちがいはない。<sup>(23)</sup>

疎外 (Entfremdung) は、ヘーゲルが『歴史哲学』のなかで造語した語で、その書物のなかで「人間の歴史は、疎外の歴史である。」といっているように、疎外は古くして新しい問題である。前述の英語の Alienation は、その訳語である。現代においては、「完全に疎外された個人」すなわち大衆人が、サド的マゾ的な権威主義的関係のなかで、容易にみずからの権利を放棄し、それを独裁者に譲り渡してしまう傾向が問題なのである。

### 「昔の主人」

フロムの『自由からの逃走』の原題は、Escape from Freedom である。英国で出版されたときのタイトルは、Fear of Freedom すなわち『自由の恐怖』と題されていた。自由は恐怖である。不自由のときには、自由を待ち望むが、自由を得た瞬間、ただちに自由に恐怖を感じて、それから逃走する。これが大衆人の特徴である。そして、大勢に順応してしまう。ファシズムの苗床は、大衆人のこころのなかに存在するのであ

る。アメリカ版『戦争と平和』ともいべきマーガレット・ミッチェルの長編小説『風と共に去りぬ』（一九三五）のなかに、奴隷解放が実施されたその時にもとの主人に戻してくれと、通りすがりの女性に泣き泣き哀願する黒人の科白につきのような一節がある。

「お嬢さま、奥さま、おねがいどうぞえます。わしのむかしのご主人さまに手紙を書いてくださいえまし。向こうのフェイアット郡にいらっしゃいます。ご主人さまは、この古いぼれ黒ん坊を、また連れもどしてくださいえまし。ほんとに、解放なんて、もうたくさんでござえますだ<sup>(24)</sup>」

一方で解放を喜ぶ人もいれば、自由におそれをなしてもとの状態に戻りたいという人もでてくる。この黒人のように、自由とは恐怖にほかならないと感じる多くの人がでてくる。これが大衆の時代の特徴である。われわれは、果たしてこの黒人を笑うことができるであろうか。この黒人と同じように、自由に恐怖を感じているのではないであろうか。第一人称単数のもつ権利を放棄することは、むかしのご主人を求めることになるのではないだろうか。

大衆社会は、『特性のない男』（ムジールの小説のタイトル）たちの集団である。一人ひとりが『孤独な群衆』と化して、連帯も共働もない、原子化された個人の不安や恐怖をたくみに組織したのが、ファシズムやスターリン主義であった。ファシズムが権力を掌握・維持しえたのは、秘密警察やグラウグ（ソビエト連邦の特殊收容所）などを背景にした恐怖政治による抑圧によってではない。市民が第一人称単数を放棄することによって、ファシズムが招来されたのである。個人崇拜や権力の無謬性の神話などは、第一人称単数の放棄の産物なのである。もちろん、そ

の背景には疎外の問題がひそんでいることは見逃しえない。

ヘーゲル以来、この問題は、カール・マルクスによって、徹底的批判的に検討された。かれはこの問題を「自己疎外」(Selbst-Entfremdung)の問題として、経済学および社会学の視野から検討した。「初期のマルクス」あるいは『若きマルクス』(G・ルカーチ)の課題すなわち『経済哲学草稿』(一八四四)は、この問題に集中した著作であった。『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の著者F・テンニースもこの問題を論じている。

この問題を文学的課題にしたのは、二十世紀ではフランツ・カフカが著名である。かれの『審判』や『城』のテーマは、まさに疎外の問題そのものをあつかっている。アルベール・カミュの『異邦人』などもこの問題を考える上で欠かせない作品で、現代作家にとって疎外の問題は最先のテーマであると考えられてきた。実存主義の傾向の作家にとっても、疎外は最大の問題だからである。

このようなテーマが好んで取り上げられるようになったのは、疎外の問題がいつの時代にも存在するにしても、二十世紀が特に重要な問題と化したからである。大衆社会の進行、科学技術の発達、経済発展などによって、巨大化体制が誕生したからで、そこでは、個人はいっそう卑小な存在となり、不安や恐怖も尋常ではなくなっていた。個人は自己実現をはかる前に自分の権利を放棄し、巨大な存在に譲渡してしまうこととなりがちである。現代は、巨大化の時代である。巨大な国家、巨大な技術体系、巨大な企業いづれも巨大主義(Giantism or Gigantism)が支配している。ルイス・マンフォードのいうように、現代は『メガ・マシン』(巨大機械)の社会である。この巨大機械のなかでは、たしかに

個人は卑小な存在にしかすぎないかもしれない。

しかし、ヒトラーやスターリンのような「権力を渴望する人」(power hungry person)に対し、「権力に無関心な人」(power different person)のままであったなら、強力な権力の餌食となるだけであろう。経済成長による「豊かな社会」の出現は、政治的無関心層を増大させた。このアパシーの増大と指導者を待望する心理がファシズムの温床となるのである。「豊かな社会」は、また個人のライフ・スタイルを大いに変えてしまっている。「砂のように出現した」大衆は、所得と自由時間を確保し、将来に対する漠たる不安と恐怖を感じながらも、「慢心したお坊ちゃん」(オルテガ・イ・ガセット)として振る舞っている。レジャーを享受することは、かつては特権の一部エリート層のものであった。現在では、一般大衆のものとなっており、大衆は、ソースタン・ヴェブレンの『有閑階級の理論』でいう有閑階級(レジャー・クラス)になっている。かつての「今日の仕事を明日にのばすな。明日には明日の仕事がある。」に取って代わって、A・ハックスレーの『すばらしき新世界』中のスローガン「今日の楽しみを明日にのばすな、明日には明日の楽しみがある。」ということが当然のこととなっている。このように、一方における機械化の進展、他方におけるレジャーの増大とが現代文明のメガ・トレンドとなっている。それでは、このような快樂主義が支配している現在、冒頭にふれたように、不安と絶望のなかで個人の尊厳を維持することは可能なのであろうか。

### 日本人の心理

前述したように、サド的・マゾ的権力関係がファシズムの温床である。

日本のマゾヒズムと日本的サディズムについて、南博は、『日本の自我』(一九八三)のなかでつぎのように指摘している。

日本のマゾヒズムが、自嘲、自責、自肅のかたちをとって、自己の欠点、罪過、他者による規制の先取りによって、結局は責任の回避と免除をねらう心理的な防衛のメカニズムだとすれば、それに対して責任を他者に転嫁する心理的な攻撃のメカニズムが、日本人に特有の日本的サディズムである。

日本のサディズムは他者の責任を問い、それをあくまで追及することであり、その場合に他者への嘲笑と他者に対する規制の強要ともなう。そこから得られる優越感と快感を樂しむのが日本的サディズムの特徴である。<sup>(25)</sup>

南の指摘している日本人の社会心理は、古くからのものであること、そして、いまでもさまざまな場面でみられる、日本的イジメの構造の心理でもある。明治維新がどのような革命であったのかいまなお、さまざまな意見がある。絶対主義政権の成立であったのか、あるいは充分ではないにしても、一種のブルジョワ革命であったのか、いろいろな見解が存在する。しかし、日本の近代化は、古くからある遺制を相当部分残しながら、達成されてきたことは否定することはできない。ムラやイエ、親分・子分、派閥などの封建的なものはいまもなお、日本の社会には存在する。日本には市民社会がないという人もいるように、近代的な市民の意識や行動が身についているかどうか、疑問なしという人は少ないであろう。さまざまなレベルの会議の場面においても、みずからの見解を堂々と主張することはほとんどなく、その場の空気をみて、会議の議案が決定されることが多い。これでは近代的な組織での議論とは、どうみ

てもいえないであろう。

### 日本の特殊性

最近、ディベート (debate) ということが強調されるようになった。国際化の進展は、さまざまな形で特殊日本的なものの抹消を迫まっている。ディベートもそのひとつで、日本人の不得意とするものである。ディベートは、民主主義の根本である。ビジネスの交渉においても、もっとも重要とされる能力のひとつである。戦後の教育改革のなかでホーム・ルームの時間がもうけられたが、ディベートの能力はなかなか育つことがなかった。国際会議の席で、日本人の得意技とされる 3S すなわち *silence*、*smile*、*sleeping* では、世界の物笑いの種であるばかりではなく、大変な不利益をこうむることとなる。いつでも、どこでも自己の意見を正々堂々と主張することが必要な時代なのである。

日本の特徴である曖昧主義は、特に国際的な場面においては打破されなければ、大いに国益を害することとなる。日本的曖昧主義の代表的なもののひとつに会議の運営がある。議題、議事の進行、決議の方法等、曖昧な運営技術にも大いに問題があるが、それ以上に自由な意見の交換がほとんどみられないことは大いに危険である。これは民主主義に反するばかりではなく、会議の開催を意味のないものにする。

このように会議で議論するという習慣が育たなかったのは、戦前の教育にも問題があったであろうが、戦後においても、このことはつづいていたのである。同じくファシズムといっても、日本とドイツのそれが違っていたことについて、飯塚浩二は『日本の精神的風土』(昭和二十七年)のなかで、つぎのように指摘している。

ナチスの鳶色のシャツや突撃隊だか親衛隊の黒の服装が、彼らの一味徒党の闘争的な自己主張を象徴していたとすれば、わが国の国防色の国民服は自己の存在を他の『みんな』のなかに没入させ、咎められまいとする、はじめから自己否定を象徴した保護色の一種であったことが特徴的である。<sup>(26)</sup>

会議で頭をたれて沈黙を守り人の顔色を窺って大勢に順応しようとするライフスタイルは、いまなおつづいている日本の風景である。飯塚のいうように「自己の存在を他の『みんな』のなかに没入させ、咎められまいとする」姿勢は、奴隷根性そのものに他ならない。ロシアの作家ゴーゴリに『死せる魂』という作品がある。『死せる魂』とは、魂をもつことを許されない人間という意味で農奴のことである。近代社会のなかで生活しているわれわれの心情は、いまなお、封建時代の前近代的な意識を解消できないでいるといっても過言ではないのである。自己否定一般が封建的であるのではない。夏目漱石のいう「則天去私」のような崇高な自己滅却ではなく、「みんな、みんな」といって自己をいつでも大勢に順応させ埋没させるような没個性的な卑屈な自己否定である。第一人称単数が互いに議論し合った結果のわれわれではなく、匿名性に隠れて第一人称複数あるいは第三人称複数に転嫁されたこの卑屈な精神を克服することが、健全な市民として自己実現するためには必要なのである。談論風発、百花斉放、百家争鳴こそが望ましいのである。

第一人称単数の思想が、日本で育たなかったのには、前にのべたように教育の問題もあったであろう。みんなと同じであることが重視され、みんなと違うと仲間からはじきとばされ差別の対象にさえなり、長い間、異質は悪く同質は良いとされてきたからである。それは打って一丸とな

って、近代国家を建設するためには、必要なことであったかも知れない。「下からの革命」がなく「上からの改革」によって「近代化」を達成してきた日本は、いつでも「工事中」で、いつでも「国家総動員体制」でやってきたからである。

しかし、そのために多くの犠牲が払われたのである。今後は、グローバルゼーションの挑戦に挑戦してゆくためばかりでなく、民主的な市民社会を構築するためにも、「特殊日本」的でやってはゆけず、異質の尊重がいっそう必要になってくる。第一人称単数の思想が肝腎なのである。その時始めて、自尊心 (self-esteem) と他者を尊重することのできる市民 (citizen) が生まれ、市民社会 (civil society) が成立するのである。civil とは「都市の」と「市民の」という両義があるように、文明 (civilization) の基礎であり、野蛮 (barbarianism) の反対概念である。

現在、大衆の不安と絶望とは、『豊かな社会』とともに併存している。携帯電話の普及をみても分かるように、情報ネットワーク社会は、人びとを「電子監獄」(エレクトロニック・プリズン) の鎖につないでいる。テクノロジー・アセスメント(科学技術の事前評価) なしに、新規な科学技術はつきつきに商品として登場しているけれども、便宜性が優先し、その危険な側面に多くの人が気づかずにいる状況である。科学技術の変化に批判精神をもたなければ、「ジョージ・オーウェルの世界」(科学技術管理体制) が近づく。この危険をさけるためには、第一人称単数の思想をしっかりもつことであり、その第一歩は、自分の意見もち、それを発言することである。勇気も教養の一部である。教養のないすなわち野蛮な社会には、自己実現もなければ文明もない。いみじくも、英語では第一人称単数の I は、文章のどこの場所にあっても大文字である。このことは意味深長であるといわなければならないであろう。

注

- (1) P・F・ドラッカー『経済人』の終わり——全体主義はなぜ生まれたか』(上田惇生訳、ダイヤモンド社、一九九七年)。
- (2) ヨハン・ホイジンガ『朝の影のなかに——わたしたちの時代の精神の病の診断』(堀越孝一訳、中央公論社、昭和四十六年)。
- (3) 前掲書。
- (4) 前掲書。
- (5) 前掲書。
- (6) アドルフ・ヒトラー『わが闘争』(平野一郎・将積茂訳、角川文庫、昭和四十八年)。
- (7) W・ゾルバルト『ドイツ社会主義』(難波田春夫訳、『難波田春夫著作集10』、早稲田大学出版部、昭和五十七年)。
- (8) E・H・カー『新しい社会』(清水幾太郎訳、岩波新書、一九六五年)。
- (9) J・ストレイチー『現代の資本主義』(関嘉彦・三宅正也訳、東洋経済新報社、昭和三十三年)。
- (10) J. Bentham, A Manual of Political economy. のなかの一節である。ここでは後出のケインズの「自由放任の終焉」のなかでの引用をもちいた。
- (11) J・M・ケインズ「自由放任の終焉」(宮崎義一訳、『ケインズ全集第九巻 説得論集』、東洋経済新報社、一九九三年)。
- (12) 前掲書。
- (13) エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』(日高六郎訳、東京創元新社、昭和三十七年)。
- (14) 前掲書。
- (15) 前掲書。
- (16) 前掲書。
- (17) 前掲書。
- (18) 前掲書。
- (19) K・ヤスパース『現代の精神的状況』(飯島宗亨訳、平凡社『現代人の思想1 病める現代』、昭和四十二年)。
- (20) アーヴィング・ホウ『大勢順応のこの時代』(尾鍋真知子訳、平凡社『現代人の思想10 組織のなかの人間』、昭和四十三年)。
- (21) エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』(日高六郎訳、東京創元新社、昭和三十七年)。
- (22) K・ヤスパース『現代の精神的状況』(飯島宗亨訳、平凡社『現代人の思想1 病める現代』、昭和四十二年)。
- (23) エーリッヒ・フロム『正気の社会』(加藤正明・佐瀬隆夫訳、中央公論社『中公バックス 世界の名著76 ユング フロム』、昭和五十四年)。
- (24) マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』(大久保康雄・竹内道之助訳、新潮文庫、平成二年)。
- (25) 南博『日本の自我』(岩波新書、一九八三年)。
- (26) 飯塚浩二『日本の精神的風土』(岩波新書、昭和二十七年)。